

鹿児島城は山城だった！

島津重年(24代)が、1755年27歳で急逝し、重豪(25代)が10歳で藩主に就任した。幼年の藩主就任は、家臣たちの動揺でトラブルになるケースが多かったため、幕府は国目付(役人)を派遣してきた。藩は想定問答集を作り対応に備えた。無事に終わったので問答集は不要になった。

ところが文書マニアの郡奉行が、その鹿児島城の部を写し取っていた。彼の名は得能通昭。『通昭録』という冊子に鹿児島城の部が含まれており、県立図書館はその写本を所蔵し、「鹿児島県史料集」に収載し刊行した。だから誰でもみることができる。

それによれば鹿児島城は山城で、曲輪くるわは本丸、二之丸に区分されているが建物、櫓やぐら、塀、堀などは全く無い。出入口は南の大手口、北の岩崎口、西の新照院口の3か所で、大手口から新照院口までが840m程、新照院口から岩崎口までが830m程で、全体が一つの広大な山と記録されている。これは城山のこと、大部分が急な崖で囲まれているために、島津氏は、その頂上付近と周囲を平坦にし建物を建て、安全に活動できる場所にした。これが曲輪で、築城当初には戦に備えた構築物もあった。その後、攻撃されるおそれがなくなり、戦いに備えた構築物は不要となった。

1612年には曲輪の番所に、城中警護のため分家の日置家常久

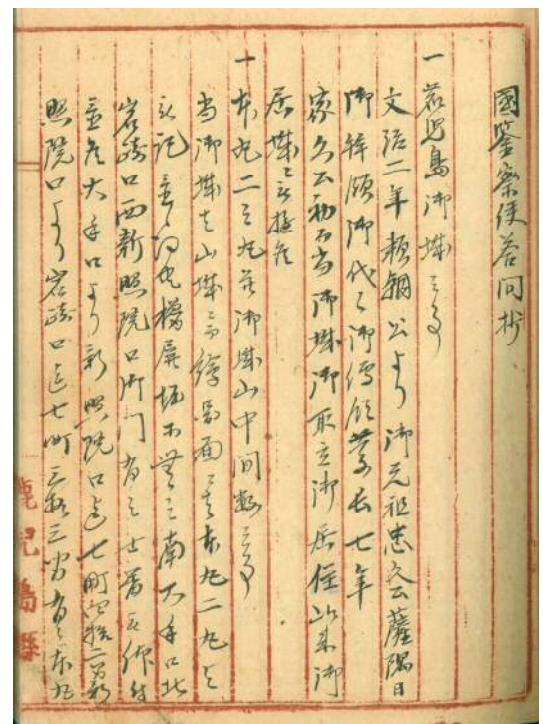
が家族と共に移された。1614年常久は城中で亡くなり、その番所跡には霊符堂が建てられた。そして、築城から150年程経った1756年には山中の本丸、二之丸には施設類は全てなくなっていた。

通昭録には、「本丸は大手口の上、二之丸は御下屋敷の上」と書かれており、山城の麓^{ふもと}には御下屋敷等が存在し、その周辺には有力家臣の屋敷が広がっていた。山城については井戸5か所、土屋敷^{さむらい}、大手口6か所と書かれたただけだったが、麓の御下屋敷や家臣の屋敷については建坪の項等11項目も取り挙げられていた。

鹿児島城には、実際には山城だけでなく麓に屋形があったのだが、山城が鹿児島城の起源であり、その役割が特段に大きかったので公的な説明においては、1756年になっても「鹿児島城は山城だった」と強調された。

国監察使答問抄
一 鹿児島御城之事
文治二年、頼朝公より御元祖忠久公薩隅日御拝領、御代々御伝領、慶長七年、家久公初而当御城御取立御居住、以来御居城ニ被遊候、

一本丸・二之丸并御城山中間敷之事
当御城は山城ニ而、絵図面ニは本丸・二丸と被記置候得共、櫓・屏・堀等無之、南大手口・北岩崎口・西新照院口御門有之、土番被仰付置候、大手口より新照院口迄七町四十二間、新照院口より岩崎口迄七町三十三間有之、本丸は大手口之上、二之丸は御下屋敷上松林也、



『鹿児島県史料集52 通昭録(一)』

鹿児島県立図書館所蔵

『通昭録 巻七』

鹿児島県立図書館所蔵